

ドイツ「森の幼稚園」における保育内容

高野牧子*¹

1. 研究目的

ドイツにおける「森の幼稚園」は、1968年ウルズラ・ズーベによって個人的に開設され、その後、1993年には公的資金を得て、2人の女性教育者が「フレンスブルグ森の幼稚園」を開設、その後ドイツ各地に増え、現在ドイツには約400の森の幼稚園がある（ヘフナー、2009:v,25-26）。A.マイザー（2003）はドイツの森の幼稚園に入園した男の子の目を通して、「森の幼稚園」での活動について、主体的な遊びや体験から学び取っていく姿を描いている。

現在、学童期には主体的、対話的で深い学びと求められている現状を踏まえ、就学前においても主体的で対話的学ぶことができる場をどのように保障し、そうした姿勢をどのように育てていくのが課題となっている。

そこで、筆者は、ドイツ、アウグスブルクにある「森の幼稚園」2園において観察調査を実施し、どのような保育内容が展開されているのか、その保育内容を明らかにすることを研究目的とする。

2. 研究方法

期間 2019年7月14日（日）～7月16日（火）

場所 アウグスブルク、ドイツ

観察日と対象園 ① Waldkindergarten am Kuhsee（湖のそばの森の幼稚園）

2019年7月15日（月）8:30～13:30

② Wald- und Naturkinder e.V. Waldkindergarten Fuchsbau

（森と自然の子どもたち フックスバウ森の幼稚園）

2019年7月16日（火）8:30～12:30

3. 研究倫理および個人情報についての配慮

両園とも研究目的での調査であることについて、同意を得た上で、観察調査を実施し、①園については、子どもの写真も含め、同意を得た。②園については、子どもを写さない条件で写真を許可いただいた。本研究での写真掲載は必要最小限に留めることとする。

4. 結果および考察

4-1 具体的な活動記録（1）

（1）Waldkindergarten am Kuhsee（湖のそばの森の幼稚園）概要

保育者 M園長（女性保育者）、保育者M、保育者C、実習生（3人とも男性）

子ども 16名（男児7名、女児9名）

参観に来た母と女児1名、保護者の母親1名（途中まで）

（所 属）

*1 山梨県立大学

セラピー犬 1頭。子どもたちはロープを持って散歩したり、撫でたりしていた。また、一人でいる子どもに犬が寄り添う姿があった。

M園長と保育者Mは以前、シュタイナー教育を行っている幼稚園に勤務し、その経験を基に二人でこの森の幼稚園を開設し、7年経つ。郡と市から援助を受けている。

(2) タイムテーブル (概ねの時間の流れ)

8:15 ~ パーキングの近くに親に連れられて、子どもたちがやってくる

8:30 ~ 人数を確認し、湖へ出発
湖畔で子どもたちは自由遊び

9:00 ~ 朝の会
年長児4名は、別メニューで小学校進級準備のため、屋内施設である放課後児童センターへ移動。入学式に持参する Schultute^{註1}を作成。
希望する子どもには文字も教える。
他の12名は湖岸に沿って遊具のある場所へ移動し、自由遊び

10:10 ~ 湖岸に沿って移動、お弁当の場所へ

10:30 ~ お弁当、ライゲン (シュタイナー教育において、輪になって歌い踊って、身体を動かす) の時間

11:00 ~ 自由遊び

12:00 ~ 片付け、移動開始

12:20 ~ 帰りの会「だるまさんがころんだ」を紹介

12:30 ~ 保護者がお迎え

13:00 ~ 学童保育所へ 昼食 昼寝 (15分程度)

(3) 具体的な活動事例及び考察

①音を楽しむ

数名の子どもたちは、まっすぐ湖に向かい、小石を拾っては湖に投げていた、その中で何人かは飽きて他へ移動したが、残った女児2名で小石が湖に落ちる音を楽しんでいた。直径1センチ程度の小石を両手で拾って湖に投げ込むと、ドボンドボンとかなり大きな音がばらばらと出た。次に、片手でより小さい小石を拾い、湖に投げ込むと先ほどよりはバラバラと小さな音を立てて小石が沈んでいった。その後も勢い良く入れたり、ゆっくり落としていたり、音の違いを楽しんでいた。

②カモの観察

親ガモが子ガモを連れて泳いでいく様子を3名の子どもたちがみて、子ガモの数を数えたり、はぐれそうに遅れていく子ガモを心配そうに眺めたり、「お母さんと子どもだね」等と話しながら、見ていた。実は、保育者Mは湖の中のどこでカモが巣を作り、卵を産み、いつ頃ヒナが誕生するか、熟知しており、子どもたちが自然と目にできるような方向に子どもたちを誘導しているとのことであった。

③釣り上げられた鯉

鯉を釣り上げた方がいた。釣り上げた鯉を子どもたちに見せるように、湖岸に置いてくれた (写真

1参照)。しかし、ちょうどその場に居合わせた菜食主義の保護者が子どもたちに、「命ある物を殺して食べなくても、野菜をいただくだけでも十分に生きていけるのに、なぜ殺すのか」と釣り上げたことに対し、自分の意見を述べていた。それを聞いて先入観を持ったまま、子どもたちは興味津々に釣り上げられた鯉を見に行った。鯉は絞められた後で、血を流して横たわっていた。恐る恐る近づきつつ、子どもたちは口ぐちの感想を言ったり、嘔吐するふりをしたりし、その後、ゆっくり離れていった。

命の教育を行うまたとない機会であったので、保育者 M は、母親が一方向的に自分の価値観を子どもたちに押しつけるように語ったことを大変残念に思っていた。



写真1 釣り上げられた鯉を見る子どもたち

④朝の会

挨拶の歌の後、出欠確認では子ども一人一人になりたい物を聞き、その動作を真似ながら、唄っていった。餌をあげる、車を運転する、馬に乗る、龍に乗るなど、子どもたちから出たアイデアを保育者が即興的に動きを示すと、子どもたちも模倣して動き、一人一人の思いに満たしていった。

⑤砂場

遊具のある公園で、多くの子どもはまず砂場で遊び始めた。筆者が観察した女兒 A は、小さな白いクマのぬいぐるみを持ってきており、妹も通っている。実習生と共にまず大きな山を作り、次に山の側面に「クマの部屋を作る」と言って、綺麗に穴を開け始めた。開けた穴にクマを入れたり、出したたりしながら、穴を広げていくうちに、穴が崩れてしまった。すると、「山の下周囲に道路を作る」と言って、山の裾野の周囲をせっせと掘り始めた。偶然勾配ができたのを見て、階段を作りたいと考え、数を数えながら、指で階段を上がるような動作をした。イメージしながら、砂を掘る中で、集中せずに不用意に掘って、崩れてしまったにも関わらず、発想を切り替え、イメージを膨らませていく様子が観察でき、可塑性に富む砂での造形を探索しながら存分に楽しんでいるように見えた。

⑥歌い出した子どもたち

男児 B と男児 C は自分たちが作った歌を大きな声で歌い始めた。さらに何人かの男児が同じようにその節回しを真似していった。子どもたちが発している言葉の意味を保育者に尋ねたが、意味不明で、子どもたちは音を楽しみながら擬音語のような言葉のリズムや音階で自然に楽しく歌っていたと考えられる。だんだん声のボリュームが上がってきたところで、一緒にいた子どもたちの数名は、耳に手をあて、うるさいといった仕草をしながら離れていったが、この曲を始めに歌い出した 2 人は誇らしそうに、また楽しげに歌を続けていった。一旦おさまったが、移動後にはまた同じ節回しで歌い始め、今日のお気に入り歌で歌っているように思えた。

⑦ 食事の時間

一人ずつの正方形の簡易マットを敷き、円形になって座る。保育者がポリタンクの水を少しずつ流

し、子どもたちは手を洗う。こうした活動は単に衛生面だけではなく、一人が多く水を使ってしまうと後の人の水がなくなってしまうことを体験的に理解し、水の大切さと分け合う大切さを理解することにも繋がっている。

全員が座ったら、食事の歌が始まる。子どもたちは自分の持ってきたお弁当を広げ、食べ始める。パンやサンドイッチ、野菜、オートミールのようなもの、果物等と飲み物を楽しそうに一人で上手にそれぞれが食べた。その間、手伝ってほしいという訴えもなく、立ち歩くような子どもはなく、食を楽しんでいた。

また、基本的にごみを出さない。お弁当にパン屋の紙袋やビニール袋などは使わない。飲み物も必ず水筒を使う。ペットボトルは使わない。どちらの幼稚園も基本的に同じルールである。

⑧ ライゲン

広瀬 (2018) によれば、「シュタイナー幼稚園では、自由遊びが終わった後に、教師の指導の下に行われる身体表現の教育が組まれている。ドイツ語の Reigen (ライゲン) と呼ばれるものである。このライゲンの時間では、人間の生活や自然の中の動物などの動きが取り上げられる」ものである。①園の保育者はシュタイナー教育を基本としており、「森の幼稚園」の中で、食後にこのライゲンの活動を取り入れていた。

a 「お花」

「花が咲いて、虫たちが花に遊びにきたよ」というハンドゲームは、きれいなメロディで、右手に花を作り、左手で訪れる虫たちを表現する。1番はてんとう虫、2番はミツバチ、3番はチョウチョとお話になっている。そして、選ばれた子どもが一人一人の花を巡る。

b 「はらぺこあおむし」

遊び方は、円の中心に1人の子どもが座り、あおむしになり、「葉っぱを7枚食べました」と食べる動作をし、もう1回繰り返す、さなぎになる。さなぎの様子をネズミ役の子どもが見にいて、さなぎになった子どもの周囲を周り、「まだ動いているよ」と歌う。次に、蚤役の子どもも同様にさなぎの子どもを周り、「動きが止まったよ」と伝える。「お日様もさして、さあチョウチョになりました」といって、さなぎ役の子どもがチョウチョに変身して飛び回るといって歌遊びである。A児が最初、やりたいといって選ばれ、青虫になったのだが、最後のチョウチョの時に、突然さなぎのまま、チョウチョになりたくないと言い、中心からしゃがんだまま動かなくなった。穏やかに保育者は対応し、無理強いすることなく、少し時間を置き、対応していた。このA児は、年長児なのだが、他の年長児たちと一緒に学童保育所での Schultüte 作りに参加しないと女兒自らが決めていた。少し発達に遅れがある女兒の不安定さに、保育者は今後も注意深く見ていこうと話していた。音楽の流れがあることで、A児の行動も包みこまれ、周囲の子どもたちがチョウチョになり、歌が終わることで、次の子どもに交替することとなり、問題行動が長引かないように感じた。

⑨ 木登りとぶらんこ

食後、自由遊びになり、茂みの中の遊び場を紹介してくれた。子どもたちは、木に登って下りたり、下がっている蔓に捕まり、ブランコのように揺れたり、弾んだりできる自然の遊び場であった (写真2参照)。保育者は決して木登りの援助はしないとのことである。通訳の荻野によれば、保育

者Mは「子どもたちが自分の力で登った所からは自力で降りられるが、手助けして登ったところからは自力で降りられない」という理由から手助けしないと決めているそうである。

子どもたちは森の中でいろいろな遊び方を工夫し、自分の体で探究を重ねていた。自分でできる達成感を大事にし、全身で工夫しながら、全力を出し切ることが自然の中で養われていると感じた。



写真2 蔓のブランコで工夫して遊ぶ

⑩ 道

遊歩道に轍があり、ミニカーを持ってきていた男児たちが、その轍をミニカーの道路に見立て、走らせていた。最初はミニカーを行ったり来たりさせていたが、その轍に枝を何本も渡し、橋のようなものを作った。それが崩れてしまうと、今度は枝を三角に組み合わせ、ゲートのように工夫して立てた、さらにしばらくすると、湖から水を道路に流し始めた。男児Cは「僕の車はどんな道でもへっちゃらで走れるんだよ」と言いながら、泥道も車を走らせていった。

他の子どもたちは道路に水を流すのが楽しくなり、次々に加わり、水をシャベルやバケツで運んで来ては、道路に流していった。すると、溢れた水が轍から湖の方向へ流れていった。M園長はそれを見て、「違う道ができていくね」と言葉をかけ、さりげなく誘導し、水が低い方へと流れる様子を観察するように子どもに促していた。

⑪ 穴

遊歩道の横に小さな穴が開いていた。子どもたちは6名程でその穴に小石がいくつ入るか詰めた。手でさらに穴を掘って、小石がさらにたくさん入るか、何度も繰り返し遊び、友達と協力しながら穴を大きくあけることに夢中になって楽しんでいった。自然の中のわずかな穴でも子どもは工夫して面白い遊びを考えだしていた。

⑫ 片付け

活動を終わらせたいと考えている時間の5分くらい前にM園長が歌を歌い出し、そろそろ終わる時間であることを子どもたちに気づかせていた。夢中になって遊んでいる子どもに無理にシャットアウトするように時間を区切るのではなく、余裕を持って徐々に片付け、遊びを終わらせている様子であった。湖から水を汲み、手を洗うようにし、子どもたちは順々に自然と順番を待ちながら手を洗い自分の遊びを終わらせていった。車座になって座り、終わりの歌を唄った後、敷物などを子どもたち自身が片付け、帰り道となった。

⑬ 排泄

車座になって座っている際、筆者の隣にいた子が、保育者の名前を小さな声で呼んだ。しかし、保育者には届かない。参観に来ていた保護者と話していたからだ。その様子を見つつ、保育者と保護者の話がちょうど一区切りついたタイミングで、大きな声で保育者の名前を呼び、トイレに行きたい旨

を伝え、保育者と共にトイレへ向かった。

大人の話が終わるまで待ち、自分の気持ちや欲求をしっかり伝えるという基本ができていると感じた。

⑭ 保護者のお迎え

元の場所にまで戻ると、保護者が待っていた。ここで帰る子どもと、午後15時まで預かる子どもと別れた。時間を20分ほど取り、保護者同士、保育者と保護者など、ゆっくりおしゃべりしていた。一見、無駄な時間のように思えるこの時間だが、穏やかな時間が流れ、保護者への伝達や、半日過ごしてきた子どもたちの様子を観察する時間ともなっていた。子どもたちもすぐに別れるのではなく、一緒に遊び、語り、ゆっくりと離れていく。ゆったりと時間に追われることなく過ごす大切さを感じた。

⑮ 学童保育所

歩いて3分程度の場所に、連携している学童保育所があり、お昼御飯を取っていた。また15分程度の午睡をここで取る。

この学童保育所は学齢期になった就学後から18歳までの子どもが自由に使える施設であり、園内には羊や鶏、ウサギ、ヤギが放し飼いになり、豊かな自然環境の中で動物との共存もはかっていた。園庭にある木製遊具は、この学童保育所に通う子どもたちが相談して作る物を決め、保育者や保護者に援助してもらいながら、自分たちで作成しているという。また、入口付近にはモンゴルのパオのような大型テントを新設したところで、基礎の土台は保護者が作り、パオは購入したそうである。

子どもたちの休憩所と言うだけでなく、卒園後の子どもたちの様子を知る場でもある、幼児教育と小学校での接点となり、長い時間をサポートしつつ、子どもたちの発達を見通す役割も果たしている。

4-2 具体的な活動記録 (2)

(1) Wald- und Naturkinder e.V. Waldkindergarten Fuchsbau

(森と自然の子どもたちフックスバウ 森の幼稚園) 概要

保育者 女性保育者2名、男性保育者1名、実習生(女性)1名、
元森の管理人で現在は保育者の方1名

子ども 5,6歳21名、3,4歳20名 計41名

18年前に自分の子どものためにプレイグループとして立ち上げ、活動を開始し、13年前から森の幼稚園を設立。公的な財政援助も得ている。

(2) タイムテーブル(概ねの時間の流れ)

8:30 ~ 登園、この園の基地となっているトレーラーの近くに親に連れられて、子どもたちがやってくる
9:00 ~ 朝の会
9:20 ~ 森へ移動
9:30 ~ 基地に到着

年齢別で分かれ、朝の会と食事タイム

10:00～ 自由遊び

5, 6 歳児の中から数名、実習生へのアルバム制作

(10:40～ 3, 4 歳児集まって、スムージー作り 15分ほどで解散)

11:30～ 5, 6 歳児 帰りの会

①実習生へ贈る言葉

②プレゼントした絵本、五味太郎『食べたのだあれ』の読み聞かせ

③保育者の朗読『長靴下のピッピ』

④今日、行ったことや感想

11:50～ 森から出発

12:00～ 保護者お迎え

(3) 具体的な活動事例及び考察

① 朝の集まり

全員で円になり、朝の挨拶の歌を歌う。3, 4 歳児グループの象徴である小さな小鳥と5, 6 歳児グループの象徴であるフックスバウ（きつねの巣穴）の小人のぬいぐるみを真中に置き、紙の筒の中に木の幹をスライスして作った名前プレート（アルファベット順になっている）を引き、今日の当番を決める。

3, 4 歳児の数を子どもたちと名前を言いながら数え、21名と人数を確認する。次に、5, 6 歳児も同様にして確認し、20名と確認し、今日の欠席者は3名の名前を確認し、始まった。

保育者は、小鳥とフックスバイの人形をそれぞれ手に取り、人形が話しているかのような口調で、今日の内容について、子どもたちに伝えた。

「今日、お宅何するの？」

「あらら、かごから出るのに、頭が引っかかっちゃったわ」

「入口を大きく切ったらいいかしら？」

「それじゃかごがばらばらになっちゃうわよ」

「ねえねえ、今週末にお祭りあるのよね」

「その準備しなくちゃね」「ピッピのお家もきれいにしてね」「実習生へのプレゼントも作りたいのよね」「紙を切ったり、写真を貼ったりね！」

この後、今日はいつも5, 6 歳児が遊んでいる基地の方向に爆弾が見つかったので、そちらは行かず、一緒に活動することを人形が話しているような口調のまま伝えていった。

② ウサギ

ちょうど朝の会をしている最中に、少し離れたところをウサギがぴょんぴょん跳んで茂みに隠れていった。子どもたちも見に行った。すると、保育者は、ウサギが死んだら、どうなるのかの話を始めた。実は前日、子ウサギが森の中で死んでいるのを子どもたちは見ていたそうである。

保育者「ウサギは死んでしまったら、どうなるのかな？」

子ども「転がっているよ」

子ども「誰かが食べちゃうかも」

保育者「誰が食べるの？」

子どもたち「ねずみ」「いたち」「きつね」

保育者「きつねは死んだ生き物は食べないんじゃないかしらね」

このような会話の後、森に出発後、森の中で白いふわふわの毛がたくさん落ちている場所に着いた。前日、子ウサギが死んでいた所だそうだ。しかし、子ウサギの姿はなく、血も落ちていなかった。

森の基地に到着後、5,6歳児の子どもたちの朝の会では、再び、ウサギの話となった。

子ども「子ウサギ、いなくなっていたね」

子ども「誰かが持っていったのかな？」

子ども「キツネが持っていったんじゃない？」

子ども「でも、食べたのなら、血が落ちているはずだよ」

子ども「私、子ウサギに詩を書いて、あそこにあげたいな」

保育者「森の生き物、全部にそんな風にするのかしら？ 私はそんな必要はないと思うわ」

自然の中で、生死を間近に観る機会をどのように活かしていくのか、子どもたちに自分で考えさせること、話し合いの中で自分の意見を言わせること、その中で自然の厳しさと命の大切さに気づかせている。一方で、子どもの気持ちを尊重して、詩を捧げる活動へ展開することもできたと考えられる。いずれにせよ、安易に保育者が結論を押し付けるのではなく、「死」について子ども自身が考える機会を積極的に作るということが重要であると感じた。

③花摘み

3,4歳男児2名が、きれいに咲いている花をどんどん摘み始めた。それを見て、保育者は彼らを止めた。

保育者「それ、何に使うの？」

男児「家に持って帰って飾るの」

保育者「草も生きる権利があるのよ。自分が楽しむために勝手にどんどん切ってしまうといいのかしら？ それに、最近、ミツバチが減少していること、知っているよね。お花が少なくなるのも困るのよ」

2名の男児は一旦、反省したように見えたが、摘んだ花は捨ててしまい、また一人の男児は繰り返し摘もうとした。もう一度、注意をしたところ、興味を変え、二度と花摘みはしなかった。

その後のインタビューで、この生き物、森の中にある物の持ち帰りについて、保育者に質問したところ、次のように回答した。

「虫などの生き物は家に持って帰らなくても森の中で十分観察できる。しかも本来の虫の暮らす条件で。基地にある木切れや石を持って帰ると次の日に遊ぶものがなくなって残念。ここにある物はみんなの共有財産なので、持ち帰らせない。しかし、途中の道に落ちているものなどは持って帰るのは許可している」という説明であった。

日本の森のようちえん^{注2}では虫かごを持参し、好きな昆虫や見つけた昆虫を育てることを目的に捕まえ、虫かごに入れ、大事に育てている。生態を調べ、その虫の好む環境も整え、餌もあげている。しかし、こうしたことには批判的であり、基本的にはその場にいる虫も含め、採らない、持ち帰らない、そこで、生きる権利を尊重することが基本となっていた。

④ 花壇を作る

女兒Fが斜面を利用して、土を掘っていた。尋ねたところ、花壇を作るとのこと。一人で黙々と土を掘り、小石を丸く並べていたところ、男児3、4名も加わる。

男児たちは、女兒より高いところの斜面を石でそれぞれ掘り、枝を地面に指していった。保育者に何に見立てているのか、何を作っているのか尋ねたが、「地面を掘ったり、枝を指したりするのが楽しいんじゃないか。何かを作ろうと意図していたり、イメージしていたりはしない」と説明された。行為そのものの楽しさでいい、特に完成形を求めない、また行為に意味をあえて持たせたりしないといった保育者の姿勢が見られた。一般的には遊んでいる子どもに対し、すぐに「何作っているの」「それなあに？」と問いたくなるのだが、行為の意味づけではなく、子どもたちが遊ぶ行為そのものに価値を置いているように感じた。

その後、しばらくすると、男児たちは活動に飽きてしまい、その場から去っていった。

しかし、最初の女兒Fだけはその場に残り、事例③の花摘みで捨て置かれた花の莖たちを土に立つように地面に差したり、丸く飾って置いたり、彼女の花壇作りの花になった。

この女兒Fは自由遊びの時間、この花壇作りに没頭し、さまざまに形態が変わりつつ、集中して遊びこんでいた。興味関心がどんどん変わる子どもも多い中で、そのどちらの遊び方も保証され、子どもの意思が十分に尊重される場であると感じた。

⑤ パトカーごっこと探検あそび

5、6名の男児たちが縦列になり、頭の上に木の板を乗せ、片手で押えながら、「パーポーパーポー」と緊急車両のサイレンに音を再現しながら、走り回っていた。お気に入りの板がない子は、両手を頭の上にあて、同様に声を発しながら、走り回った。

また、大きな木の根に3名の男児たちが代わる代わるよじ登った。一人がニワトリのような真似をしながら、よじ登った2人に話しかける。大笑いしながら交替し、木の根に立ちあがったり、乗ったりが続いた。次に、3人でわっと走りだし、枯れ枝が積まれている山を覗き込み、そして登り始めた。3人とも登り終わると、山の上から反対側の丘の上を見るようにした後、さっさと降り始めた。その様子は探検ごっこをしているようで、次々に面白そうで、自分たちで挑戦できそうな自然環境を見つけるとは、チャレンジしているように見えた。

自然環境からイメージを広げ、いろいろなものに見立てて、遊ぶ姿である。イメージしたものになりきって、体を存分に使い、友達と関わりあいながら、主体的に遊びを深めていた。

(4) 設定保育

① 3、4歳児「レモネード作り」

円になって座る。

ボールとその中にざるを入れ、そこに冷凍のミックスベリーを入れる。

ひとりずつ、ベリーを1粒程度味見をする。

冷たい、甘いなど、感想を述べる。

すりこぎのような木の棒でベリーをつぶす。

順番で一人ずつ、出ていってつぶしていく。

しかし、冷凍で固まっており、なかなかつぶせず、配慮になっていった。

一巡したところで、様子を見てみると、やはりまだまだ凍っていて、つぶせない。そこで、全員で太陽を呼ぶことにする。

「ゾンネ Sonne」子どもたちの声に反応するかのように、日差しが振り注ぐが、すぐに陰ってしまう。しばらくすると、もう少し日向の椅子へ全員で移動。しかし、なかなか柔らかくならないので、一旦子どもたちは自由遊びにし、保育者がつぶす作業を行っていた。

② 5, 6 歳児

実習生への写真集プレゼント作りは、昨日していない子どもたち5～6名が、実習生との思い出の写真や紙を切って貼る活動を行っていた。上手く切れなくても、写真がゆがんでまっすぐに貼れなくても、そこに味が出るとして、あえて、きれいに直線で切らなくても良いし、写真の貼り方も子どもの自由に任せていた。また、スティックのりを使い、屋外でも簡単にできるようにしていた。

11:30には、森の中にあるピッピの小屋（写真3）に集まり、帰りの会が行われた。そこで、写真集の最後のページに、実習生に伝えたいことを一人ずつ言わせ、保育者が書きこんでいった。

その後、筆者が持参したプレゼントの絵本、五味太郎『食べたのだあれ』の読み聞かせを行った。通訳の方も「あえて訳さなくても良く観ればわかるよ」と伝え、子どもたちは各ページで絵を楽しみながら、誰が食べたのか、当てていった。最後まで集中して楽しんでいた。

最後に、保育者による『長靴下のピッピ』の朗読の時間となった。15分ほど、たまに挿絵を見せる程度で、大半は言葉を聞き、話を理解し、物語の世界の想像を膨らませるように促していた。何人かは飽きて手でいたづらをしたり、帽子で遊んだりしていたが、読み聞かせをしていないもう一人の保育者が目や指差して簡単に諭し、物語に集中するように促していた。また、トイレに行きたくなった子は自分で申し出て、済ませ、また戻ってきていた。朗読後に、子どもたちは今日の感想や自分がやったことを話し、森での活動を終了した。



写真3 5, 6 歳の子もたちが集まる森の中にあるピッピの小屋

5. まとめ

森や自然の中で、子どもたちを育む森のようちえんは、自然環境豊かな山梨でも多様な形態の園が活動している。日本では、幼小接続期にこうした園を卒園した子どもは、小学校の教育方法になじみにくいという指摘を受けることもある。

しかし、今回視察した2か所の森の幼稚園の子どもたちは、小学校に入学後も好奇心旺盛で集中力があり、主体的で優秀であるとの評価を受けているということであった。

視察した2園とも活動中、自分で考え、探究し、発見する遊びの中での学びが、それぞれの子どもの活動の中にみられた。保育者は熟知した自然環境の中で、安全に配慮しつつ、子どもの好奇心や探究心を高めるような環境へ誘導し、子どもに指示することなく、言葉かけも極力しないで見守り、困って子どもが訴えてきた時には援助するという教育のスタンスは一致していた。

特徴として、①の湖の園では、シュタイナー教育の幼稚園の保育者を経験してきた後、自分たちで「森の幼稚園」を設立した背景により、歌を合図に次の行動に移っている。朝の会では挨拶の歌、出欠確認も子ども一人一人になりたい物を聞き、その動作を真似ながら、歌っていった。遊びを終わらせたい時の片付けの歌、食事の前の歌、集まりでの遊びにも動作を伴う歌が用いられた。心の安定のために毎日の繰り返しを重んじ、穏やかな時間の流れの中で、子どもたちは伸び伸びと自分のやりたいことを遊んでいた。

また、子どもたち自身も音を楽しみ、即興的に作った歌を歌う様子から、音への関心が高く、豊かな感性が育まれる機会が多いと感じた。「自然の音は、子どもの想像力を羽ばたかせる。(中略) 謎めいた音、知らない音は想像力の源になる。この力が創造的学びの基盤を作る」(ミクリッツ 2018:117) と指摘している。この指摘は、森の静寂の中、子どもたちはわずかな音から想像力を発揮していくことを示している。①園では、こうした静寂の機会と共に、シュタイナー教育でのライゲンも活動に取り入れ、より積極的に音に対する感覚を養っていると考えられる。

②園では、森の中に2か所の基地があり、木の手作り遊具が設置されていた。今回、視察した際には、爆弾が発見されたということで、一方の基地は使えず、全員でもう1つの基地での活動となった。こちらの園では、毎日概ね決まったタイムテーブルがあり、教育的な指導もしながら、森の中で伸び伸びと子どもたちは自分のやりたい遊びを発見し、展開し、充実した時間を過ごしていた。一人一人自由に遊ぶ時間も保証されている一方、朝の集まりの時間や終わりの会での時間も十分に取っていることが特徴であった。特に終わりの会では、年長児に対して、本(今回は『長靴下のピッピ』)を保育者が朗読し、その語りを聞いて物語のイメージを膨らませる時間を15分ほど取り、活発に体を動かす時間と落ち着いて考える時間の両方をバランスよく提供していると感じた。

また、ドイツでの環境教育の考え方として、「子どもたちの自然の中での責任を自覚した触合いが基礎となる必要がある。人間にとって、このような初体験は基本的に重要である。というのは、自然をただ多彩で唯一無比のものと知るのを学んでいただけで、誰でも保全と保護に等しく貢献できるからである」(ヘフナー、2009:30) とあるように、幼児期から自然を保護保全しなければならないことを明確に伝え、行動を促すことを重要視していた。あえて、食物連鎖についても積極的に取り上げ、また、植物や虫たちをその自然環境のままに生きることを保証しなければならないと強く指導していたことが特徴として挙げられる。

子どもたちの主体的な学びを補償するために、十分に自由な時間を取り、環境の中から、子どもたち自身が遊びを考え出し、友達と工夫する中で、学びが得られていた。接続教育の中で重要なことは、教科の基礎を教えこもうとするのではなく、子どもたちが学びへ向かう主体的な姿勢や探求心を育むことであり、ドイツでの「森の幼稚園」は示唆に富むものであると指摘できる。

注1 Schultüte とは、小学1年生が初めて登校する日に親からプレゼントされる筒状の物で、中にはこれから学校で必要になる文房具や好きなお菓子などを入れる。通常は幼稚園で保育者や保護者と一緒に作り、デザインも色もその子が好きなものを自由に選んで、中身は親が考えて入れることが多い。これから小学生になる年長児にとって、とても楽しみであり、少し先の小学校に入る自分をイメージする嬉しい作業でもある。

<https://www.bing.com/images/search?q=Schult%c3%bcte&qpv=Schult%c3%bcte&FORM=IGRE>
2019.9.30. 参照

注2 日本では「森のようちえん」と平仮名で表記し、従来の保育所、幼稚園、認定こども園の枠だけではなく、子育て支援団体なども包括する意味を持たせている。

本研究は、科学研究費 基盤研究 (C) 課題番号15K01525「身体表現・ダンス教育による接続カリキュラム構築」により、調査研究を行った。また、ドイツの森の幼稚園にも精通している通訳の荻野さんに心より感謝申し上げる。

引用文献

- ・ A. マイザー、今泉みね子訳 (2003)「森の幼稚園 シュテルンバルトがくれたすてきなお話」合同出版
- ・ 広瀬綾子 (2018)「幼児期における「身体表現」の教育—世界に広がるシュタイナー幼児教育を中心に—」新見公立大学紀要第38号2号 ,pp.47-54
- ・ P. ヘフナー、佐藤竺訳 (2009)『ドイツの自然・森の幼稚園』公人社
- ・ I. ミクリッツ、国土緑化推進機構監訳 (2018)『森の幼稚園 ドイツに学ぶ森と自然が育む教育と事務の指南書』風鳴舎